世界のスローシティ（海沿いのまち）
比較研究レポート

Comparative Research on

World Slow Cities beside the Sea

世界のスローシティ気仙沼へ向けて

Toward World Slow City, Kesennuma

Sep, 2013

気仙沼復興塾

（JA 共済寄附講座・早稲田大学震災復興のまちづくり）

Kesennuma Resilience Group

Waseda University, Japan

目　次

はじめにー世界の気仙沼へ向けて エールをこめてー　・・・・・・・・・・・(気仙沼復興塾一同)・・・1

持続可能な成長・スローシティへ向けて
～脱成長 かたつむりの知恵～　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・3

スローシティ（cittaslow）運動について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・(西森佳悟)・・・3

世界のスローシティ(海沿いのまち) MAP　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・5

世界のスローシティ 優れたポイント比較検証　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・6

＜事例集＞

<事例 1>カウチン・ベイ（Cowichan Bay）[カナダ]
カナダの太平洋への出口　サーモンのまち　・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・11

<事例 2>アマルフィ （Amalfi） [イタリア]
イタリア南部の海洋リゾートのまち　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(中村光宏)・・・12

<事例 3>チャンサンド(青山島) (Cheongsando Island) [韓国]
韓国南部の伝統漁村集落のまち　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(柳下萌季)・・・13

<事例 4>ベアウィック・アポン・ツイード(Berwick-upon-Tweed)[イギリス]
イングランドとスコットランドの２つの文化が交わる河口のまち　・・・・・(早田 宰)・・・14

<事例 5>マタカナ （Matakana） [ニュージーランド]
ニュージーランドのファーマーズマーケットのまち　・・・・・・・・・・・(瓜本陽子)・・・15

<事例 6>グールワ（Goolwa）[オーストラリア]
オーストラリア南部のワインとくん製の香るまち　・・・・・・・・・・・・(瀬川奈央)・・・16

<事例 7>アキャカ（Akyaka）[トルコ]
トルコのエーゲ海にそそぐアズマック川の清流のまち・・・・・・・・・・・(岡田真也)・・・17

<事例 8>スベンボル(Svendborg) [デンマーク]
デンマーク島部の北欧の玄関口のまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・18

<事例 9>タヴィラ(Tavira) [ポルトガル]
ポルトガルのリスボン地震津波を乗り越えたまち・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・19

<事例 10>フランカヴィッラ･アル･マーレ（Francavilla al Mare）[イタリア]
イタリア中部のアドリア海の環境保全のまち・・・・・・・・・・・・・・・(原田佳奈)・・・20

〈事例 11〉トラーニ（Trani）［イタリア］
イタリア中部　中核交易港から漁業観光のまちへ・・・・・・・・・・・・・・・(井上 文)・・・21

〈事例 12〉カパルビオ(Capalbio)［イタリア］
イタリア中部　海辺に集い語る文化のまち・・・・・・・・・・・・・・・・・(吉田優佳)・・・22

〈事例 13〉レケイティオ（Lekeitio）［スペイン］
スペインバスク地方びんちょうまぐろと奇祭のまち・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・23

〈事例 14〉ヴィアナ・ド・カステロ(viana do castelo)［ポルトガル］
ポルトガル建国の軍港、焼きイワシ香る祭りのまち・・・・・・・・・・・・(小城知紘)・・・24

〈事例 15〉ラゴス（Lagos）［ポルトガル］
ポルトガルの大航海時代の玄関口のまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・(松田 祐)・・・25

〈事例 16〉クロナキルティ（Clonakilty）［アイルランド］
多様な市民が集うブラックプディングのまち・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・26

〈事例 17〉クリスチーヌスタッド（Kristinestad）［フィンランド］
フィンランドの歴史伝統ある市場が開催されるまち・・・・・・・・・・・・(西村真穂)・・・27

〈事例 18〉ポッリカ（Pollica）［イタリア］
イタリア南部の伝統アンチョビ漁のまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・(竹内理恵)・・・28

〈事例 19〉ソクンダル(Sokndal)［ノルウェー］
ノルウェーの北海沿岸のサーモンのまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・(彦坂千絵)・・・29

〈事例 20〉サンヴィンツェンツォ（San Vincenzo）［イタリア］
イタリア北部のかつおのまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(品川達宏)・・・30

〈事例 21〉マリアガーフィヨルド（Mariagerfjord）［デンマーク］
デンマークのフィヨルド水上周遊のまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・(鈴木雄太)・・・31

〈事例 22〉チュンド（曽島）（Jeung-do Island）［韓国］
韓国南部の干潟と伝統塩田の村・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・32

〈事例 23〉セジフィールド(Sedgefield)［南アフリカ共和国］
アフリカにおけるリゾートと地域農村の共発展をめざすまち・・・・・・・(吉田優佳)・・・33

〈事例 24〉ベグール（Begur）［スペイン］
スペイン東部の断崖と小さな入り江が連なるまち・・・・・・・・・・・・・(早田 宰)・・・34

〈事例 25〉レヴァント（Levanto）［イタリア］
安全、景観、経済を総合的に考えた海沿いの散歩道の美しいまち・・・・・(瓜本陽子)・・・35

〈事例 26〉ポジターノ（Positano）［イタリア］
イタリアの海洋リゾートのメッカのまち・・・・・・・・・・・・・・・・・・(高橋雅臣)・・・37

〈事例 27〉気仙沼・唐桑（Karakuwa area, kesennuma City）［日本］
気仙沼かつお漁発祥、浜の連なる・森は海の恋人のまち・・・・・・・・・・(岡本一花)・・・38

〈事例 28〉気仙沼・本吉（Motoyoshi Area, Kesennuma City）［日本］
奥州藤原氏の栄華、砂浜の海岸美、まんぼうのまち・・・・・・・・・・・・・(高木美沙)・・・40

〈事例 29〉チッタスロー 日本の取り組みは今［日本］
各地・東北における県レベル、地区レベルの取り組み・・・・・・・・・・・・・(渡邊 諒)・・・41

はじめに

－世界の気仙沼へ向けて　エールをこめて－

３．１１の前に戻すだけでは意味がない。津波を契機に、持続可能なまちをつくることが本当の復興である。哲学のない都市づくり事業は失敗する。気仙沼が独自の個性を生かした都市づくりを本当にめざすのであれば、その哲学を深める上で重要な契機を与えてくれるのが「スローシティ」である。

スローシティは、日本ではまだまだ耳慣れないコンセプトである。持続可能な開発の世界的な運動のひとつであるが、イタリア発で世界に約 150 の都市が認定されている運動で、イタリア語では、チッタスロー（Città slow）という。厳しい 55 項目の認定基準があり、生活の質の向上、とりわけ食を重視している。

内容に入る前にこの「スロー」という言葉について補足しておきたい。
スローとは「スピードが遅い」ことと単純に理解されてしまいがちである。震災復興を加速しなければならないときに禁句だという人もいた。スローシティの議論をする時、必ずといっていいほどその定義に相当の時間をさいて説明なければならなくなる。誤解をする人が必ず出てきてしまう。哲学を今後しっかり議論していくために、英語の語源やラテン語のもつ意味にさかのぼって slow という言葉が一体「ゆっくり」以外にどういう意味を含むのか確認しておきたい。

歴史的に見ると、12 世紀まではシンプルに「遅い」「ゆっくり」という単純にスピードを表現する言葉である。どちらかといえばネガティブであきらめのニュアンスが強いようにも思われる。15 世紀頃になると人間は技術の発達で自らの運命や生きる状況を自らコントロールすることができるようになる。この頃より人間は、自然の脅威や神への服従から相対的に自由になり、自分主体が中心に環境の中で生きてゆけるようになっていく。環境や状況を思い通りに加速させ、制御し、生産時間、生活時間、流通時間、余暇時間の選択肢の幅が大きなっていく。そのころから slow に精神的な余裕を重視するニュアンスが言葉に込められていく。
以下の６つの精神が「slow」という言葉に込められているニュアンスで、欧米で暗黙の共有されている精神である。

◆「じっくり」　（※単なる「ゆっくり」ではない）
納得のいくまで「じっくり」取り組む。時間の流れに逆らい、あえて「slow down」する意味が込められる。キープ（keep），抑制する（restrain）という、「あえて拙速を避ける」という意味である。

◆「しなやかなに」
時間概念が変化することでフレキシブル（flexible），順応性（pliant）という質的な意味をもつことになる。「可変性」、「適応力」という意味が強くなる。状況の変化に対応する能力をもつ。

◆「多様に」
　時間概念が変化することで、見えないものが見えてくる、画一的でない選択肢の活かし方を検討する機会が与えられる。選択肢が多様化する。代替戦略を探す発想、創造的な余力を持つ、その準備をする。

◆「堅実に」
　slow には「折りたたむ」「仕切りをもつ」と言うニュアンスに通じていく。「むやみやたらに拡張しない」ことによって可変性を高める、コントロール能力を高めるということは空間的にはその範囲を拡散しないという意味が込められている。
　たとえば、かたつむりは生物の適応戦略が発達している。形態上、冬蓋という膜を持つことによって厳しい状況下でも自己を保全し生き延びることができる戦略も持っている。これは周辺環境に対してあえてフィルターを持つことで自立を維持することを示唆している。こうした概念も slow の意味の延長した範疇に入ってくる。

◆「次の時代を見すえて」
　slow という言葉に込められた意味は、自分のペースを回復することで自己統治力（self-sustain)、さらには復元力（resilience）を発揮する道筋を探すための、「余裕」「冗長性」(redundancy）を獲得するというニュアンスがある。その「溜め」のサイクルが slow である。

◆「よく議論して」
　slow には、deliberate, つまり done with careful consideration、より「慎重」、「計画的」、「思慮深い」、「熟議」という意味がある。この意味を込めて slow movement は使っていることは明らかである。政治学でいう、deliberative democracy＝熟議民主主義と通底している。

　以上の６つは日本人が slow という言葉から感じにくいニュアンスである。slow city のネットワークに参画した気仙沼が世界にきらりと光る都市になるためには、以上について共有認識をもつ必要がある。新しい思考習慣の革新、ライフスタイル、オルタナティブな都市像、都市の楽しみ方とホスピタリティ、統合的なシンボル構築、双方向コミュニケーションなどの抜本的なバージョンアップが必要である。誇りをもって妥協しない都市づくりの姿勢をもつことがスローシティになるということである。ここが一番肝心なところである。

　まずは、世界のスローシティの本レポートの景観の写真を見ていただきたい。また、Youtube にも「世界のスローシティ」を動画でアップした。その景観の美しさ、いかに永遠の瞬間を大切にしているか、そのためのコミュニティを大切にしているか、感じ取ることからはじめるべきだろう。「このくらいでいい」という妥協では世界のスローシティには到底なれない。

　気仙沼の本当の復興の正念場はこれからである。その議論の一助に本レポートが役に立つのであれば望外の幸せである。

　２０１３年９月

気仙沼復興塾　一同

持続可能な成長・スローシティへ向けて
～脱成長 かたつむりの知恵～

かたつむりをトレードマークにしたスローシティ運動はイタリアで 1999 年に生まれる。その哲学の地域への浸透はこれからだ。巷では、スローフードによる美食志向をローカルコミュニティに広げることでしょう？と理解する人が多い。食イベント、メニュー開発を切り口とし、最終ゴールは、生活の質の改善をともなうオルタナティブ開発といっしょに考えることである。かたつむりの脱成長に関する生態的説明を加えておこう。

イヴァン・イリイチの説明

「かたつむりは、精妙な構造の殻を幾恵もの渦巻に広げると、そのあとは習熟した殻つくりの活動をぱたりとやめる。渦巻を一重増やすだけで、殻の大きさは 16 培にもふえてしまう。そうなると、この生き物には目方の負担がかかりすぎて、かたつむりという安定したくらしに貢献するどころか、生産を少しでもふやすと、目的にしたがって定められた限界以上に殻を大きくすることからくる困難に対処する仕事のために、文字通り重みがかかりすぎるという結果になるのである。この点で、過剰成長からくる問題は幾何級数的に増大しはじめるのにたいし、かたつむりとしての生物の能力はせいぜいで算術級数的にしか大きくならない」

（イリイチ「ヴァナキュラーなジェンダー」1984, p173）

セルジュ・ラトゥーシュの説明

「かたつむりは、幾何学的理性としばらくの間は共に生きていたが、ある時点で決別した。この譬喩は、われわれに「脱成長」社会－可能であれば平和で共愉にあふれる「脱成長」社会－を考える筋道を示している。」「ここでいう「脱成長」とは、成長を機械的に反転することではなく、より節度ある、より均衡のとれた自律社会を構築することを意味する。」（「経済成長なき社会発展は可能か？」2010, p158）

ちなみに、世界最大のかたつむりは、アフリカマイマイ（写真）で、体長 20 センチです。これが成長の限界である。

（早田　宰）

スローシティ（cittaslow）運動について

本部のあるオルヴィエート（イタリア）

スローシティは、イタリア語でチッタスロー(cittaslow)で、1999 年から始まった地域の個性を重視した新しい都市づくりの運動である。目的は「スピード重視で均一化されつつある世界への対抗」、つ

まり地域ごとの文化や独自性を大切にしようという活動で、元はスローフード運動の流れからきたものである。本部のあるイタリアを中心に、世界中に加盟都市が広がっている。

本部の主な活動は、チッタスローにふさわしい街の厳選、またチッタスローを成功させるためのアイデアづくりなどが挙げられる。チッタスローには 50 以上のルールが有り、それに則って審査し、運動されている。以下がそのルールの大もとになる 6 つの基本原理である。

・都市に住む全ての人々へよりよい生活
・都市における生活品質の向上
・都市の均一化、グローバル化への対抗
・環境の保護
・各都市の文化的多様性、独自性の推進
・より健康的なライフスタイルの推進

チッタスローの組織は、国際レベルで認証をうけたまちが 3 つ以上あり、国内ネットワークが存在する国から１人ずつ委員が選ばれて構成される２２人の国際委員会があり、国際理事会は会長と理事長と９人の副会長で１１人構成されている。

国内レベルでは認証都市の市長による国内委員会がある。さらにはチッタ・スロー・インターナショナルの学術委員会に加えて、理事事務局（ヘッドクオーター）がある。

実際の運営をしている理事会事務局は、オルヴィエートにある。ローマとフィレンツェの中間にある美しい城塞都市で、その「美食のひろば」（Il Palazzo del Gusto）にチッタスロー協会の事務局が住所を置いている。

事務局の作業は、都市の認定、あらゆるミーティングのオーガナイズ、プロモーションなど、日常のほぼすべての作業を担当しており、チッタスロー協会の拠点本部となっている。

(西森佳悟)

住所: Via Ripa Serancia, 1, 05018 Orvieto Terni, イタリア

参考文献

公式サイト

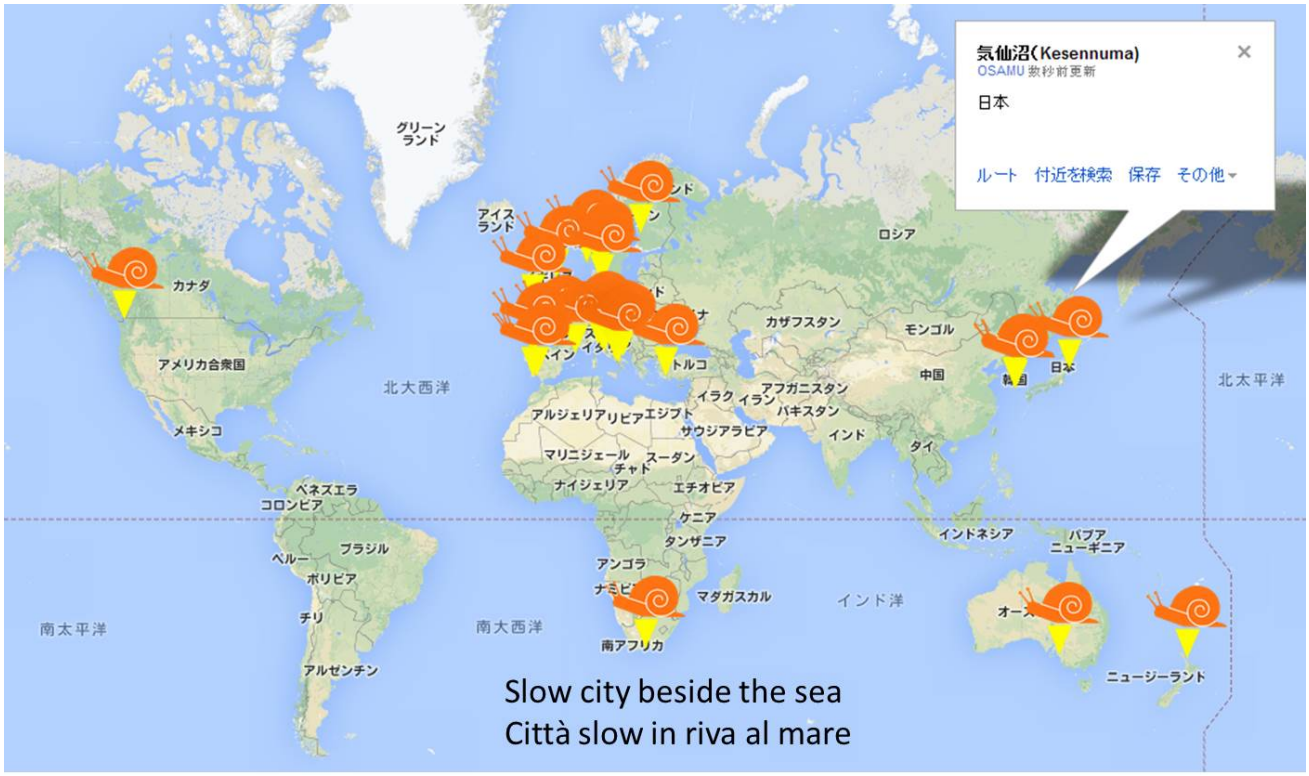
http://www.cittaslow.org/

http://www.slowfoodjapan.net/blog/2012/02/24/2760/

http://travelersnote.net/jp/2011/07/04/cittaslow-slow-city/

世界のスローシティ（海沿いのまち）

世界の海沿いのスローシティは２７（2013現在）ある。都市ごとに魅力あるまちづくりをしている。気仙沼もそのひとつである。



世界のスローシティ MAP

WEB 版はこちら（Google MAP）

https://maps.google.co.jp/maps/ms?msid=203299502357715683996.0004e36be6a8bb2f8f379&msa=0&ll=12.960232,113.813917&spn=150.525876,68.554688

世界のスローシティ　優れたポイント

世界の２７の海沿いのスローシティの比較調査の結果、復興塾の議論のなかで評価の高かった点をピックアップした。あくまで主観的なものであるが、８つの視点から整理した。

１．食・スローフード①（魚介類など水産物の魅力を活かす）　☆☆☆

◆冬（ツアー閑期）のご当地メニューづくり

<事例22>　シナングン・チュンド　メウンタン（魚の辛味鍋）

◆ご当地の火の使い方を確立する（燻製、藁焼きなど）

<事例6>　グールワ　大オーストラリア燻製まつり

◆海産物の味つけの聖地としてPR

<事例18>　ポッリカ　「フレーバーの港」イベント

◆ご当地ソースを確立する。味つけで勝負する

<事例26>　レヴァント　バジル（ジェノバ）ソース

◆魚種ごとの世界を深める

<事例13>　レケイティオ　びんちょうまぐろ祭り

<事例20>　サンヴィンツェンツォ　はがつお祭り

２．食・スローフード②（里・山の農作物の魅力を活かす）　☆☆☆

◆コミュニティガーデンを運営する

<事例6>　グールワ　無農薬野菜の共同栽培　朝市で販売する

◆地元果物の農園を訪ねるツアー

<事例27>　ポジターノ　岩斜面地のレモンツアーの催行

◆地元果物でお酒・リキュールを開発する

<事例2>　アマルフィ　リモンチェッロ（イタリア原産のレモンを用いたリキュール）

◆地ビールの製造

<事例21>　マリアガーフィヨルド　ビール醸造所めぐり

◆店と来街者が楽しく参加できるフードイベント

<事例1>　カウチンベイ　24時間ローカルチャレンジ（24時間以内の収穫のみ食べる）

３．オルタナティブ開発の都市像のコンセプトを明確化する　☆☆☆

◆持続可能な成長のスローシティ戦略をしっかり、じっくりつくる

<事例17>　クリスチーヌスタッド　チッタスローによる都市の戦略　2010-2020

◆災害をのりこえた歴史をアピールする

<事例>　タヴィラ　1755年リスボン地震・津波から再生したまち

◆スローシティ団体が船を保有し、港で活動する

<事例4>　海難救助艇ボランティア活動

◆海の環境保全に力を入れる

<事例10> フランカヴィッラ・アル・マーレ ブルーフラッグ

◆伝統的な漁業を保存する

<事例18>　ポッリカ　伝統アンチョビ漁の若手への継承

◆ペットと楽しめる海水浴場

<事例20>　サンヴィンツェンツォ　犬用の無料ビーチ（dog beach）

◆ファーマーズマーケットと既存店舗の共存

<事例5> マタカナ　マーケットに隣接して開催、スーパーやカフェと相乗効果

◆最高の景観ポイントの食事の場所をつくる

<事例10> フランカヴィッラ・アル・マーレ　桟橋のグループ貸切り

◆美しい防潮堤の上にレストランをつくる

<事例22> レヴァント　防潮堤

◆演劇＋美食を楽しめる場をつくる

<事例18>　ポッリカ　ガルド村の演劇＋食事のセットの夕べ

４．生活の質の向上　☆☆☆

◆エコビレッジをつくる

<事例5>マタカナ 環境にやさしい支え合い暮らしコミュニティ

◆スパ（温泉）を楽しむ

<事例20>　サンヴィンツェンツォ　スパ（温泉）

◆トイレを素晴らしいアートでつくる

<事例5>　マタカナ　公衆トイレ

◆釣りを楽しめるようにする

<事例1>　カウチンベイ　カウチンベイ・サーモン

◆花＋海を美しい景色を楽しめるガーデニング

<事例3>　ワンド　サンシュユの黄色い花畑

◆健康＆美容の商品

<事例5>　マタカナ　ボディケア商品

◆ローカルな素材のファッション

<事例27>　ポジターノ　地元の麻でつくるハンドメイドグッズ

◆結婚式のメッカにする

<事例2>　アマルフィ　路上での結婚式

◆地元も住民も伝統服・特定の服で着飾る

<事例17>　クリスチーヌスタッド　夏祭り

<事例1>　カウチンベイ　白い服で集まり食べる

５．海・里・山のアクティビティ　☆☆☆

◆スポーツイベントと相乗効果

<事例9>　タヴィラ　マウンテンバイクレース

◆クラシック音楽ファンがくるコンサート

<事例2>　アマルフィ　ワーグナー演奏オーケストラ（2ケ月開催）

◆漁業を体験する観光

<事例11>　トラーニ　ペスカトゥーリズモ（漁業観光）

◆奇祭をする

<事例13>　レケイティオ　ロープにつるされたガン（雁）にとびつく祭り

<事例22>　シナングン・チュンド　新安ゲルマニウム干潟祭り（泥んこ祭り）

◆交流都市の祭りをする

<事例25>　ベグール　キューバとの移民交流を祝うり

◆来街者が参加できる環境イベント

<事例1>　カウチンベイ　プラスチックは死なない

◆子ども参加の楽しい食育をイベント

<事例8>　スベンボル　乳搾り体験

◆つくる体験

<事例22>　シナングン・チュンド　塩田体験

◆まちあるき＋環境学習＋健康ウォーキング＋美食のミックス型ツアー

<事例3>　ワンド　スローウォーキング祭り

<事例9>　タヴィラ　タヴィラ美食フェスティバル

◆学者や本好きが集い、思想・哲学を語るイベントをする

<事例12>　カパルビオ　「倫理学への情熱」

◆骨董市を開催する

<事例4>　ベアウィック・アポン・ツイード　夏の骨董市

６．推進体制づくり―分野横断的な広がりをつくる取り組み―　☆☆☆

◆コンセプトの明確な店舗を認定する

〈事例19〉　産業協会と協力してチッタスロー企業の認定

◆コンセプトの明確な店舗同士のネットワークをつくる

〈事例1〉　カウチンベイ　飲食店のみならず、小物、陶器店など

◆若者をにがさない取り組み方

〈事例30〉　唐桑地区　からくわ丸　若者参加のまちづくり

〈事例31〉　本吉地区　うえみらい　若者参加のまちづくり

◆地域のもてなし力を高めるための人材育成。料理人のホスピタリティをみがく

〈事例6〉　グールワ　料理デモンストレーションに挑戦しよう

◆オルタナティブな固有の歴史をアピール

〈事例8〉　ブレヒト（ナチスドイツから亡命）が住んだまち

◆世界観に影響を与えた港であることを誇る

〈事例15〉　ラゴス　「世界の果て」はないことを証明

◆世界的な文化財を保存する

〈事例12〉　カパルビオ　プッチーニのピアノを保存

７．誰にもわかりやすい看板・サイン設置　☆☆☆

◆スローシティ（国際＝かたつむり）のサインを設置する

〈事例〉　多数

◆スローシティ（自国＝かたつむりにかわる）のサインを設置する

〈事例〉　多数　独自のデザイン

◆スローシティをアートで表現する

〈事例1〉　カウチンベイ　亀のオブジェ

８．ホスピタリティのある情報・双方向コミュニケーション　☆☆☆

◆英語でツアーガイドする（パンフレットをつくる・ヘッドフォンのデバイスなど）

〈事例〉　多数

◆小冊子をつくる

〈事例〉　多数

◆SNSで発信する

〈事例1〉　カウチンベイ　グリーンコミュニティ

◆映画･番組の撮影例･シーンをあつめる

<事例2>　アマルフィ　『アマルフィ女神の報酬』(東宝2009年)

◆音楽で地元と観光客がふれあえる機会をつくる

<事例15>　ラゴス　フラメンコフェスティバル

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ１>

カウチン・ベイ（Cowichan Bay）［カナダ］

カウチンベイ

カナダのブリティッシュコロンビア州、ダンカンの近くに位置し、2009 年 7 月に、北米初チッタスローのコミュニティになった。人口約 10000 人。

カウチン川の河口であるカウチンベイは、ハイキングコースや生態保護区になっている。風光明媚で釣りのスポットで有名。地域の主要産業は漁業と観光である。大昔より、カウチンベイサケと入り江や干潟で獲れる貝が豊富で有名であった。

1900 年代初頭からカウチンベイはすばらしい湾のサケ釣りで大英帝国の各地からスポーツフィッシングのファンを集めた。カウチンベイ訪問者には、カヤックツアーやホエールウオッチングツアーを通じて印象的な海洋動物を見る機会を提供している。

時期があえば、沿岸ではハクトウワシ、サギや他の野生動物を見ることも珍しくない。

2004 年に、ジョナサン・ナイト（Jonathan Knight）氏が、海辺の村の中心地に、手づくりライ麦パン、ヨーロッパ風のパン屋を開いた。彼のオーガニックパン、プレッツェルなどにローカルな持続可能なビジネスに焦点があたり、転換が始まった。彼の成功は、他の企業がベイに感心を持つようになり、素晴らしいスタジオ、オーガニック衣料品店、ヒラリーのチーズ、地元産のチーズ、古いスタイルの自家製アイスクリームパーラー、高級レストラン、地元の職人が運営する陶器店、他の多くの飲食店や小物のお店、おいしい地元の食材を提供する店が増えていった。

いろいろなイベントをしている。

２０１２年３月１２日には「プラスチックは死なない」というイベントをしました。レジ袋が野生動物に悪影響を与えることを考えるイベントを開催。

２０１３年３月２５日には春祭りをしました。パンケーキの朝食を食べたり、干潮を歩いたり海で遊んだ。

２０１３年６月１８日には、３つの団体が協力して「２４時間ローカルチャレンジ」というイベントを呼びかけた。２４時間以内に収穫された野菜、または漁獲された魚しか食べないというイベントである。

２０１３年８月２７日には歴史的地区を歩くイベントをした。

（早田宰）

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・２>

アマルフィ　（Amalfi）　[イタリア]

アマルフィ

イタリア共和国カンパニア州サレルノ県に位置する、人口約 5000 人の都市である。急峻なアマルフィ海岸はユネスコの世界遺産に登録されており、観光の拠点となっている。最近では、映画の舞台としても用いられたことでも有名である。

楽しみ方としては、海岸の景観を眺める、ビーチでの海水浴といったことの他に、代表的な建造物であるアマルフィ大聖堂の観光や、特産品であるリモンチェッロや漉き紙などのショッピングなどもあり、小さな町ではあるものの､1 日中過ごしていても飽きない。リモンチェッロとは、イタリア原産のレモンを用いたリキュールのことである。酒として楽しむことは勿論出来るが、マドレーヌやムースといったスイーツの原料として使うことも出来る。ローマ帝国時代から貿易港及び軍港として栄えていた歴史があり、今でもその歴史ある景観が町の至るところで見ることが出来る。

　イベントとしては、1953 年から始まったヴィラ･ルフォロ庭園内に設けた屋外ステージにてワーグナー作曲のオーケストラを開催しているラヴェッロ・フェスティバルが有名で、2003 年以降は 6 月からの 2 ヶ月間に渡って開催されている。

（中村光宏）

参考文献

アマルフィ-Wikipedia

http://ja.wikipedia.org/wiki/アマルフィ#.E8.A6.B3.E5.85.89

アマルフィ海岸-イタリアンエクスプレス

www.italiaexpress.net/taiken/amalfi.html

リモンチェッロのレシピ

cookpad.com/search/リモンチェッロ

小都市を訪ねる旅　アマルフィコースト便り

www.japanitalytravel.com/amalfi/top.html

食の祭典

http://ameblo.jp/kanokoi/entry-11339286191.html

〈世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 3〉

莞島郡 青山島
ワンドグン・チャンサンド

WANDO COUNTY (Cheongsando Island)　[韓国]

チャンサンド

莞島郡は韓国の南端にある島々から成るエリアである。2007年にアジア初のスローシティに認定された。面積は 33.28 平方キロ、海岸線の長さは 42 キロで 2~3 時間で島を一周できる。郡の人口は大きいが、島だけに限れば、約 3000 人の住民が生活している。

美しく豊かな海に囲まれた漁村であり漁業がさかんで、海女も活躍している。アワビの生産量は韓国の 9 割、昆布、ひじきは約 8 割を占める。　観光客に人気のスポットは池里（チリ）海水浴場が挙げられる。白い砂浜の後ろには老松の林が広がり、韓国でも有数の日の出の名所である。磯ではタイやメバルの釣りを楽しむ人も多い。

海だけでなく陸にも麦畑や階段式の水田、大雑把に積まれた石でできた低い石垣道が続き、美しい風景が臨める。700 軒もの伝統的な韓屋が保存されているのが最大の特徴で、昔の漁村の里でだけ見られた「風葬」やドルメン（支柱墓)、貧しさの象徴であったオンドル石の水田（米が貴重だった頃、島により多くの農耕地を作るためにオンドル石を敷き詰めてその上に土をかぶせて米を栽培した）などがそのまま残り、地元のお年寄りに会えば土地のことばで微笑みながら声をかけてくれる。そんな昔ながらの田舎らしさが特徴である。住宅や石垣の保存・修復に地域に力を入れている。

近年は多くの映画、ドラマが撮影されており、映像産業と連携した観光地としても人気がある。

チッタスローに関連するイベントとしては、2009 年に始まった世界スローウォーキング祭りがある。これは青山島や莞島薪智鳴沙十里海水浴場を参加者たちが直に歩く体験プログラムである。有名歌手などを招待して行われる記念公演や、莞島の美味しいグルメが味わえるスローフード試食イベントなど、様々なプログラムが用意されている。

（柳下　萌季）

参考文献

・Citta Slow 韓国　http://www.cittaslow.kr/japan/eng_main.asp

・三進トラベルサービス「スローライフな全羅南道の旅　莞島・青山島５日間」
http://www.sanshin-travel.com/tour/detail.php?sid=1189

・韓国観光公社「莞島郡　青山島」
http://www.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE_JA_7_3_8_10_1.jsp

・世界スローウォーキング祭り(スカイニュース新聞記事)
http://www.skynews.co.kr/article_view.asp?mcd=308&ccd=6&scd=2&ano=311

・国際スローシティ指定の意味と推進過程
http://www.dailyjeonbuk.com/news/articleView.html?idxno=113994

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 4>

ベアウィック・アポン・ツイード

(Berwick-upon-Tweed)[イギリス]

ベアウィック・アポン・ツイード

ツイード川にかかる人口 11500 人の美しい町で、スコットランドとイングランドの境界に位置し、その所属をめぐって、歴史上、13 回の紛争があります。

まちの歴史の象徴であるジョージ王時代の「デュワーズ・レーン穀物倉を」リノベーションしたプロジェクトがシンボルで、過去のまちの歴史をビジターに伝えています。

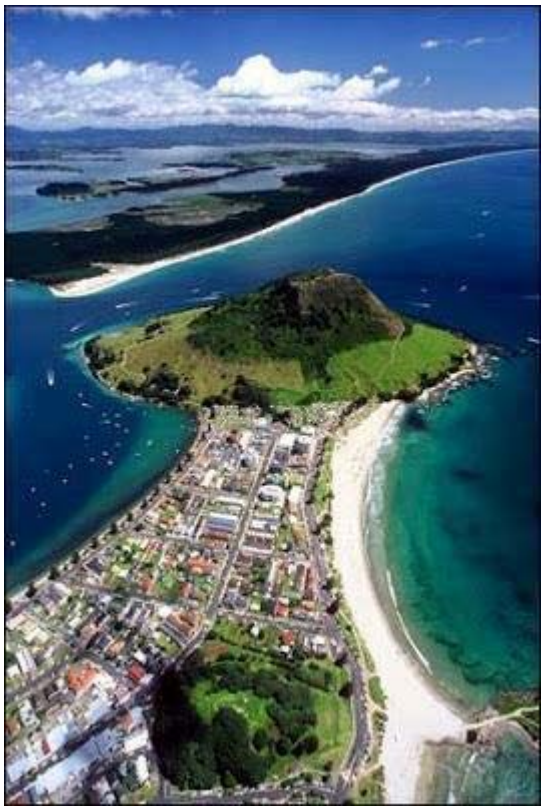
スローシティには 2008 年から加盟しました。08 年には 14,000 人以上の来場者が参加し、鉄道ウォーク、展示、フィルム上映などをしてきました。毎年夏の骨董市が人気です。

2011 年からベアウィックアポンツイードの cittaslow 団体は、救助艇の共同経営者になりました。川のまちの歴史と誇りを伝えるものでボランティア、学校および大学生が参加し、前の栄光にそれを戻すことを目標にしています。地元の蜂蜜ファームの経営をしています。9 月には食＆ビール祭りを３日間してにぎわいます。

（早田　宰）

〈世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 5〉

マタカナ　（Matakana）　[ニュージーランド]



マタカナ

マタカナは、オークランドから東海岸沿いを車で約 1 時間行ったところに位置する小さな田舎町。人口は数百人と、とても小規模。海岸近くには高さ 600 mに及ぶ山々(火山)が連なるため、マタカナの土壌は排水性に優れ、ミネラル豊富で、特に鉄分の含有量が高いものになっている。こうした土壌と温暖な海洋性気候を生かし、様々な特産品が存在する。

1980 年、ヴルティッチ　ジェームズ、ペーター兄弟は、初めてマタカナにブドウ畑を作り、1990 年にプロヴィダンスワイナリーを設立。まだまだマタカナのワイン生産地としての歴史は浅いが、希少な品種のブドウを使用していることから近年注目されている。

マタカナ内にある、Rainbow Valley Farm(ジョー・ポラッシャーとトリッシュ・アレン夫妻による、1988 年設立)は、エコビレッジに認定されている。エコビレッジとは、人々が支え合い、環境に負荷の少ない暮らしを追求する者が作るコミュニティで、世界各地に作られている。Rainbow Valley Farm は、パーマカルチャー（持続可能な農業＝Permanent + Agriculture ＝ Permaculture）の実践モデル農場であると同時に、その教育・普及活動を積極的に行っていることからエコビレッジに認定された。

毎週土曜日の朝 8 時から開催されるファーマーズマーケットには、各地から多くの人が訪れ、お祭りのような賑わいをみせる。エリアは広くはなく、カントリー風に調和の取れた店々が軒を連ねる。ワインやチーズ、オリーブ、ハチミツ等のオーガニック特産品だけでなく、地元デザインのクラフト品なども売られている。大自然の恵みから採れたオリーブを使用したボディケア商品も開発され、注目が集まっている。その他、マーケットに隣接してスーパーやカフェもあり、相乗効果を図っている。

観光客をはじめ、各地からマタカナの良さを紹介するために、ワイナリー、チーズやハチミツファクトリーを巡るツアーがいくつも用意されている。まちの中心部に建てられた公衆トイレのデザインが目を引き有名になっている。

（瓜本陽子）

参考文献

・エコビレッジとは

http://begoodcafe.com/project/ecvc/ecvc_about

・マタカナヴァリー　ライム&オリーブ（ボディケア商品）

http://begoodcafe.com/project/ecvc/ecvc_about

・WINE WAY

http://www.wineway.jp/index.php?dispatch=categories.view&category_id=115

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 6>

グールワ（Goolwa）[オーストラリア]

グールワ

グールワは、南オーストラリアに位置する人口 5882 人の港町で、マレー川の河口にある。

グールワとは現地のアボリジニの言葉で「ひじ」という意味。マレー川の湾曲部が描き出す地形に由来するものと考えられる。周辺ではクーロン国立公園やアレキサンドリア湖などをはじめとした雄大な自然が広がっている。

グールワの港はオーストラリアで始めての内陸港で 1853 年に開港された。当初は川から運ばれてきた品物を海へと出てゆく船に積み込む中継点としての役割を果たしていた。鉄道の発達によりグールワの港としての重要性は薄れていった。その沿川貿易の衰退にともなって、グールワは漁業、農業、観光のまちへと移り変わっていった。

食を大切にする取り組みとしては、元来、コミュニティガーデンがある。地元の人々が共同で運営している。無農薬の野菜を育てる技術を次の世代へと受け継ぎ、地元の人々のつながりを生み出す場になっている。この農場で作られた野菜は、毎週木曜日の朝に庁舎の前で販売され、その収益は農園の運営に使われている。

チッタスローには 2007 年 3 月に参加した。

ワインと食へのこだわりが強く、それらに関するイベントが多く開かれている。そのひとつが「大オーストラリア燻製まつり」(Great Aussie Smoke Off)である。このイベントは各コミュニティがハムや魚、七面鳥などをそれぞれの家庭の技とレシピで燻製にして味を競い合うというもの。また、その季節ごとの食材を生かした調理方法などを紹介する「料理デモンストレーションに挑戦しよう」(How to Cooking Demonstration)も定期的に行われており、地元で作られる食材をたのしむ様々な工夫がされている。

（瀬川奈央）

参考

©Cittaslow Goolwa

http://www.cittaslowgoolwa.com.au/index.html

＜世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 7＞

アキャカ（Akyaka）[トルコ]

アキャカ

アキャカはトルコの南東、エーゲ海に面し、イズミールの南 200km にある。人口 2,621 人（2009 年）の小さな都市である。ギョコワ湾の奥に位置する。

アキャカの海には多様な海洋生物が生息している。都市の東側を流れるアズマック川と河口は稀少な生態系を保全しており、地中海モンクアザラシやカワウソなどといった国際的な保護の下におかれた希少種も生息しており、自然の水族館ともいわれる。

水質は透明度が高い。

市域のカルカでは、現代的なリゾートタウンとして確立させることを目指している。2010 年にトルコで第二のスローシティに認証された。夏には外国人観光客と宿泊客の到着により一万人を超える。多くの観光客が訪れる。ボートツアー、浅瀬で足をつかれる場所や食事をする場所がある。

自然愛好家、オーガニックや自然食品を食べたい人たちが訪れる。その雰囲気を保つため、アクティビティも、電動ウォータースポーツは禁止されており、レストランもアンプを使った音楽の演奏は禁止されている。

食文化としては、トルコは宗教が 99%イスラム教であるため、豚肉は食べず、羊肉のケバブ、魚肉のシシュケバブ、キョフテ（肉団子）などがトルコ料理として有名である。魚は、ハガツオの塩漬けラケルダ（lakerda）は前菜として一般的で、レモンとオリーブオイルをかけて食べる。牛肉を半生で乾燥させたパスティルマ（Pastirma）、ハルヴァ（小麦粉の伝統菓子）などがトルコのスローフードとしてある。アキャカではエーゲ海の魚介類を水際のレストランでゆっくり楽しむことができる。

スポーツが盛んで、カイトサーフィン、シーカヤック、ラフティング、山ではロッククライミング、パラグライダーなどが楽しめる。

（岡田真也）

参考文献

http://www.cittaslowturkiye.org/cittaslow-turkiye/akyaka-hakkinda/84-akyaka-hakk-nda.html

http://www.akyakakentkonseyi.org.tr/cittaslow/cittaslow-brosur-eng.pdf

http://www.akyaka.bel.tr/

http://www.slowfoodjapan.net/blog/2013/06/25/4162/

http://atesnaar.blogspot.jp/

http://www.yeniasir.com.tr/HayatinIcinden/2010/11/08/akyaka_sakin_sehir_olacak

http://www.turizmhabercisi.com/akyaka-da-sakin-sehir-olmak-istiyor.html

http://www.hurriyetdailynews.com/slow-city-akyaka-closer-to-unesco.aspx?pageID=238&nid=46323

〈スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 8〉

スベンボル(Svendborg)　[デンマーク]

スベンボル

スベンボルは、南部デンマークのフュン島とトーシンエ島の２つの島からなる自治体である。自治体全体の人口は 58,551 人、うちフュン島にある人口 26,783 人。島なみの美しいロケーション、個性ある海洋文化の雰囲気が魅力である。産業では、世界最大のコンテナ船会社、AP モラー･マースクはスベンボルにその起源を持っている。ドイツの作家ブレヒトがナチスドイツから亡命して住んだまちでもある。

まちの中心部にはモダンなアパートやタウンハウスがあり、郊外には別荘や一戸建て住宅、小さな町や村の静けさと親密さ、自然へと開かれた眺望や環境がある。

2008 年にチッタスローに加盟した。スベンボルは、伝統的な景観の上に現代的な持続可能性の政策を重ねる新しいチッタスローをめざしている。「クリナリー・シュフュン」（Culinary Sydfyn）という団体が毎年大きなチッタスローをコンセプトにしたイベントを開催している。

食材は豊富で、チーズ、きのこ、魚、ビールが有名。イベントは、フードフェスティバルは毎年行っている。「かたつむり祭り」（2009）も行った。６月末にはチッタスローのイベントを中心市街地で行い、北欧チーズ祭りを開催している。地元産の品質のいい製品が評価されている。美食サロン、乳搾り体験、子どもの料理教室、などがおこなわれている。

（早田宰）

(参考)

スベンボルの Web

http://www.svendborg.dk/

Culinary Sydfyn

http://www.kulinarisksydfyn.dk/

スローフード店リスト

http://www.kulinarisksydfyn.dk/images/KS_spisekort2_2012.pdf

写真引用元

http://www.kulinarisksydfyn.dk/photogallery.php

http://www.pfahl-4you.de/40985.html

スベンボルのビデオレター（動画）Youtube

http://www.kulinarisksydfyn.dk/viewpage.php?page_id=29

〈スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 9〉

タヴィラ(Tavira)　[ポルトガル]

タヴィラ

タヴィラ（Tavira）は、ポルトガルの南東、人口 26,167 人、街並みを構成する建築群が美しいまちとして有名である。8 世紀から 13 世紀までムーア人が征服し、建物の壁を白塗りとした。今日でもサンチアゴ教会などまちにその影響が見られる。

1755 年のリスボン地震は、マグニチュード 9 に達し、まちは壊滅的に破壊されました。津波も発生し、アルガルヴェなど被害は広汎に及びました。沿岸部は干潟として自然を保全している。

11 世紀から、塩、干物、ワインの港として発展した。かつてはマグロ漁でにぎわったが、回遊ルートのパタンが変わり、漁業は前より小規模になっている。

2008 年 12 月にタヴィラはチッタスローに参加した。それ以後、
「タヴィラ美食フェスティバル」（the Tavira Gastronomy Festivals）を毎年、３月中旬、運動の基礎として開催している。友人や家族と散歩し環境保護を学んだあと、いくつかの伝統的なレストランで文化について語りながら高品質な食事を楽しめる。地元の陶磁器も人気である。

2013 年からタヴィラではマウンテンバイクのレースをしている。性別、国籍とわず 16 歳以上の人が参加できる。4km、歴史的な城、教会、街、ローマ橋などタヴィラの変化に富んだ旧市街地をまわり、全地域の活性化に寄与します。マウンテンバイクのスポーツの訪問者、観光客や愛好家でにぎわう。

（早田 宰）

<世界のスローシティー海沿いのまちをゆく・シリーズ 10>

フランカヴィッラ･アル･マーレ（Francavilla al Mare）[イタリア]

フランカヴィッラ･アル･マーレ

フランカヴィッラ･アル･マーレは、中部イタリアの東側、アブルッツォ州キエーティ県に位置する、人口約 25000 人の町である。

19 世紀末～20 世紀始めに画家のフランチェスコ･パオロ･ミケッティをはじめとする芸術家たちが集まり、創作活動をしていたことで知られており、町にはミケッティ修道院、ミケッティ美術館などがある。その他にも中世につくられたいくつかの塔や修道院が、第二次世界大戦のときにも破壊されず残っている。近代には、都市の開発が進み、別荘や邸宅が立ち並ぶ観光地となっている。

町の一大イベントとしては、アブルッツォ･カーニバルがあり、戦後すぐに始まり現在まで続いている。毎年 3 月に市内の大通りで行われ、市外からも多くの人が訪れる。テーマを決めて作られたワゴンと共に、バンドやオーケストラ、市民や子どもたちが行進する。

スローシティには 2008 年に加入している。他に、環境認証「ブルーフラッグ」にも認定されている。こちらは、水質、環境教育と情報、環境管理、安全などのサービスに関する厳しい基準を通じて、ビーチやマリーナにおける持続可能な発展の実現を目指すものである。

スローフード運動としては、周辺の地域と共に「Cala Lenta」を結成し、食をテーマとしたワークショップをはじめとする、様々なイベント開催している。

また、Trabocchi と呼ばれる海岸から海へ突き出した小屋のような場所で、海で捕れた食材を使ったスローフードを楽しむことも出来る。

(原田佳奈)

<参考文献>

フランカヴィッラ･アル･マーレ-Wikipedia

http://it.wikipedia.org/wiki/Francavilla_al_Mare

Cala Lenta

http://www.calalenta.com/

Comune di FRANCAVILLA AL MARE

http://www.comune.francavilla.ch.it/pagina0_home-page.html

写真

http://www.abruzzocitta.it/foto/fotolocalita/francavilla/francavilla12.jpg

〈スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 11〉

トラーニ（Trani）　［イタリア］

トラーニ

「アドリア海の真珠」とも称されるトラーニは、アドリア海岸沿岸の人口 55,826 人の都市。バルレッタ＝アンドリア＝トラーニ県の県都のひとつである。漁業と農業を中心とした歴史ある港町である。トラーニという町の名前は、ホメロスの叙事詩イリアスの英雄ディオスメデス（町の創設者とされている）の息子、ティッレーノに由来している。中世にはアドリア海の南部交易の拠点として栄えた。その名残りとして「オルディナメンタ・マリス（Ordinamenta maris）」という中世最古の海商法が残っている。トラーニは司法の中心地でもあった。16 世紀から 19 世紀にわたり県庁や裁判所が設置された。現在も地方裁判所がおかれており、司法の中心地ともなっている。

11、12 世紀にかけて建設されたサン・ニコラ・ペッレグリーノ大聖堂はこの町の最大の名所である。従来は観光客はこの大聖堂だけを訪れ、町そのものを観光することはあまりなかったようである。

チッタスローに加盟してからは、大聖堂だけではなく個性ある地域、漁港にも目が向けられるようになった。人々が水辺に集い、地元食材を使用した料理やワインを楽しむ光景もよく見られるようになってきた。

また、ペスカトゥーリズモ（漁業観光）も生まれつつある。漁船で海に出て、釣りやスキューバダイビングを楽しんだり本物の漁を体験するという新しい観光の形である。トラーニでは、観光客にサイクリングで町をまわることも推奨しており、五感で楽しむ観光を目指している。

（井上　文）

引用・参考

Pront d'ITALIA
(http://www.italia.gr.jp/citta/puglia/trani.html)

Trani Turismo
(http://turismo.comune.trani.bt.it/it/Default.aspx)

COMUNE DI TRANI
(http://www.comune.trani.bt.it/)

Wikipedia
(http://ja.wikipedia.org/wiki/バルレッタ＝アンドリア＝トラーニ県)

陣内秀信,2010『イタリアの街角から　スローシティを歩く』弦書房

なんでもないものの発見～チッタスロー（地産地消）で地域力を引き出す～
(http://www.mizu.gr.jp/images/main/archives/forum/2009/forum2009_jinnai.pdf)

＜世界のスローシティ―海沿いのまち―をゆく・シリーズ 12＞

カパルビオ(Capalbio) [イタリア]

カパルビオ

カパルビオは、イタリアのトスカーナ地域グロセート州にある人口 4,046 人の自治体である。フィレンツェの 150km 南に位置する城塞都市でアルドブランデスコ城にあるメルラータ塔が有名で、今日もその美しい景観が賞賛されている。

カパルビオから 12km ほど海側にあるモンテ・アルジェンタリオは島状になった天然の良港である。ポルト・エルコレとポルト・サント・ステーファノの 2 つは、古代からの港になっている。現在は海上路で陸つづきになっている。

周辺地域は古代からブドウ栽培の伝統を誇り、今日まで新しい技術を導入してワインを生産している。

カパルビオは、芸術を保護する町として名高く、アルドブランデスコ城にはプッチーニが使用したピアノを保存している。タロットカードのシンボルをモチーフとした彫刻庭園である「タロット・ガーデン」は、イタリアの彫刻家ニキ・ド・サンファルが 20 年かけて作り上げたもので、幻想的な空間を楽しむことができる。

スローシティ認証後は地域の個性を活かした多様なイベントを開催している。

2013 年 8 月には読書を楽しみ語るイベント「倫理学への情熱」（LA PASSIONE DELL'ETICA）が開催された。その後の夕べは音楽でにぎわった。

(吉田優佳)

写真

http://www.holidayhomestuscany.com/villas-for-rent-by-area-villas-maremma-tuscany-capalbio.html

参考文献

turismo.intoscana.it

http://honyaku.yahoofs.jp/url_result?ctw_=sT%2Ceen_ja%2CbT%2CuaHR0cDovL3d3dy50dXJpc21vLmludG9zY2FuYS5pdC9pbnRvc2NhbmEyL2V4cG9ydC9UdXJpc21vUlRlbi9zaXRvLVR1cmlzbW9SVGVuL0NvbnRlbnV0aS9wcm92aW5jZS9HUi9jYXBhbGJpby92aXN1YWxpenphX2Fzc2V0Lmh0bWxfNzE3MzY0MTA4Lmh0bWw%3D

tutto maremma tourist guide

http://www.tuttomaremma.com/

食に関して

http://honyaku.yahoofs.jp/url_result?ctw_=sT%2Ceen_ja%2CbT%2CuaHR0cDovL3d3dy5tYXJlbW1hLXR1c2NhbnkuY29tL3dpbmVzL2NhcGFsYmlvLw%3D%3D

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 13＞

レケイティオ（Lekeitio）[スペイン]

レケイティオ

レケイティオは、スペイン北東部バスク地方のフランス国境に近い港町で、人口 7,293 人（2005 年）である。 バスク地方の主要漁港のひとつである。15 世紀ゴシック様式のサンタマリア教会が景観シンボルになっている。セントニコラ島には干潮時、陸続きとなる。港に停泊する伝統的なマグロ船（playa de ondarzabal, 23 メートル、28 トン）はレケイティオのシンボルである。漁業収入の 80%はアンチョビとマグロであるが、漁業は減少している。

夏は観光客でにぎわう。毎年 9 月 5 日は、イベント「ガン（雁）の日」（Antzar Eguna, Goose Day）である。海上に張られたロープから吊り下げられたガンに洋上の船から飛びつき、ロープが上下して体が海中に何度も沈む間に、その首につかまっていられる時間の長さを競うという奇祭である。かつては生きたガンで行われていた。その由来は 5 世紀前にさかのぼるといわれる。バスク地方は他のヨーロッパと異なり母系制社会で、男性はその力の強さを証明するためにおこなわれていたという。動物など自然崇拝があり、ガンは女性の象徴であるとされる。

チッタスローには 2000 年に加盟した。

食イベントでは、隔年で「びんちょうまぐろ祭り」をしている。びんちょうまぐろの関心を高め、地域のホスピタリティを高めることが目的で、レストランやバーでびんちょうまぐろ料理が出され、釣り大会が開催される。

スポーツでは、2004 年にはトライアスロン大会が開催されている。

（早田宰）

写真

http://mugalari.wordpress.com/tag/lekeitio/

http://zigwen.free.fr/espagne/pais_vasco/pais_vasco.htm

http://www.depaginas.es/fotosde_Lekeitio

http://rafarivas.photoshelter.com/image/I0000t2nspwF5DZ0

http://russellorchards.com/weblog/wp-content/uploads/2013/03/IMG_3268.jpg

http://academiavascadegastronomia.com/apuntes-de-gastronomia/bonito-del-norte-2/5664/

動画

http://www.youtube.com/watch?v=hSsJQ-vqQ-s

参考

http://en.wikipedia.org/wiki/Lekeitio

〈世界のスローシティ-海沿いのまち-をゆく・シリーズ 14〉

ヴィアナ・ド・カステロ(viana do castelo) [ポルトガル]

ヴィアナ・ド・カステロ

ヴィアナ・ド・カステロ(viana do castelo)はポルトガル北部の人口約 90000 人程の都市である。リマ川の河口にあり、別名「リマの女王」と呼ばれる。そして、ミーニョ地方最大の祭りである「嘆きの聖母祭　(別名：ロマリア祭)」が、毎年 8 月頃に４日間開催される。祭りの際には、アゴニア教会を目指し各地から巡礼者が集まる。男女ともに民族衣装を着て、「ギガンテ」と呼ばれる巨大な人形と共に街を練り歩く。

1253 年にアフォンソ三世がこの地に街をつくった事がこの街の起源とされている。そして、大航海時代、特に１６世紀には、この港から大西洋へ乗り出す航海者の母港として繁栄した。この街に残る有名な文化遺産の多くはこの時代につくられた。その後、大航海時代が終わってからも漁師達が鱈を取るなどして繁栄した。ちなみに、現在の主な産業は造船業である。また、この街があるミーニョ地方は雨が多く、豊かな農業地帯となっており、「ヴィーニョ・ベルデ」と呼ばれる微発泡ワインが有名である。

チッタスローには今年 2013 年 6 月に加盟した。ポルトガルでは第 6 番目の加盟都市になる。ちなみに、北部ポルトガルでは二番目である。そして、加盟前の 2013 年 3 月には 3 日間、国際会議が開催され、スローシティ間の新しい関係やスローシティ開発の新しいモデルなどについて議論が交わされた。

(小城　知紘)

【参考 URL】

Câmara Municipal de Viana do Castelo
〈http://cm-viana-castelo.pt/〉　(2013 年 8 月 31 日アクセス)
Viana Criativa
〈http://www.vianacriativa.pt/viana-do-castelo-slow-city/?lang=en〉(2013 年 8 月 31 日アクセス)
TMN Entrada Livre、Beijo-te, Viana、
〈http://tmnentradalivre.sapo.pt/eventos-pagos/beijo-te-viana-2728〉(2013 年 8 月 30 日アクセス)
Instituto Politécnico de Viana do Castelo [IPVC] 、CONGRESSO INTERNACIONAL "CITTASLOW"、
〈http://www.ipvc.pt/viana-criativa-congresso-cittaslow-agenda)　(2013 年 8 月 31 日アクセス)
RTP、Viana Slow City、
〈http://www.rtp.pt/programa/tv/p29914/e41〉(2013 年 8 月 31 日アクセス)
Wikipedia、ヴィアナ・ド・カステロ、
〈http://ja.wikipedia.org/wiki/ヴィアナ・ド・カステロ〉　(2013 年 8 月 30 日アクセス)
武本睦子あっちこっちポルトガル、ヴィアナ・ド・カステロのロマリア祭
〈http://blog.goo.ne.jp/takemotomutsuko/e/7599df9d96efde5b8445b4f7366e06d8〉(2013 年 8 月 31 日アクセス)
西田進のホームページ、ポルトガル(1)、
〈http://www.nishida-s.com/main/categ2/portugal-1/portugal-1.htm〉　(2013 年 8 月 31 日アクセス)
ワイン通販レ・ブルジョン、ヴィーニョ・ヴェルデ(Vinho Verde)、
〈http://www.lesbourgeons.co.jp/SHOP/5195/5201/list.html 〉(2013 年 8 月 31 日アクセス)

〈世界のスローシティ―海沿いのまち―をゆく・シリーズ 15〉

ラゴス（Lagos）[ポルトガル]

ラゴス

ラゴス（Lagos）はポルトガル南部、アルガルベ地方南部沿岸に位置する地中海沿岸の町で、1981 年当時は人口 1 万人、今では 3 万人を超えている（2011 年）。

町の歴史は古く、紀元前 2000 年にケルト人が入植したことに端を発している。当時の町の名前は、ラコーフリガ（Lacobriga）であった。沿岸に面したこの町は目の前に広がる海とのつながりが深く、15 世紀前半にエンリケ航海王子が当地に居を移してからは、対岸のアフリカ大陸への遠征の玄関口の港として発展を遂げた。

ラゴスを起点として数々の大陸航海の物語が生まれていった。かのジル・エアーネス（Gil Eanes）航海士が、ボジャドール岬（Cabo Bojador）が「世界の果て」ではなく、また海に怪物など棲んでいないことを立証するために出航したのもこのラゴスであった。

昔は、アフリカへの探検の出発地となったが、ラゴスで生まれたのは英雄の物語だけではない。ヨーロッパで最初に奴隷市場が開かれたのもこの地であった。現在は、奴隷市場の現場となった場所は、地元の手工芸品の販売・展示場となっている。現在この町の文化に重要な役割を担っている。

近年ではその歴史、地の利を活かし観光開発も活発で、漁港としても重要な港になっている。

ラゴスの食は、市場が拠点である。毎週土曜の朝に開かれる朝市には、地元で獲れた新鮮な魚介類、果物、野菜、オリーブ、はちみつ等が小さい売場にところ狭しと並ぶ。値段が安く、朝早く起きて小銭を持っていくことも観光客の楽しみである。

スローシティには 2008 年にタビラと同時に加盟した。観光面では、マウンテンバイクやカヤック、シュノーケリングなどマリンスポーツを中心にアウトドアをその柱に据えている。音楽も充実しており、弦楽器と室内楽コンサート、フラメンコフェスティバルなどのコンサートが数多く催されており、地元民と観光客がふれあえる。こうした機会が増えたのも、スローシティに認定されたことを受けている。

ラゴスはポルトガルの南西端の小さな町であるが、伝統も受け継いだ多様な活動がいつも同時に行われているスローシティである。

（松田 祐）

〈参考文献・出典など〉

・Cittaslow（スローシティ）
http://www.cittaslow.org/
・ラゴス（コトバンク）
http://kotobank.jp/word/ラゴス
・新世界発見の町、ラゴス
http://www.visitportugal.com/NR/exeres/FA65B87D-0170-4CEE-896C-EB1E6666F6D5,frameless.htm
・Algarve Resident
http://www.algarveresident.com/30972-23818/algarve/embracing-slower-pace-of-life
・旅行者による日記（今宵のサカナ）
http://kozumon.exblog.jp/1966636/
・LogosUncovered
http://www.lagosuncovered.com/home.aspx
写真
http://www.algarvehousing.net/portugal/lagos/

＜世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 16＞

クロナキルティ（Clonakilty）[アイルランド]

クロナキルティ

クロナキルティは、アイルランド南部、海沿いの小さなまちである。人口は 4,721 人(2011 年)。周囲は丘陵地帯の農地になっている。アイルランドは歴史上イングランドとの永い紛争状態にあり、とくに南部は多様な人々が住んできた地域である。アイリッシュ音楽のまちとして知られる。2012 年の洪水で被災している。

アイルランド初のフェアトレードの町であった。それがチッタスロー運動の源流になっている。自分たちが行うすべてのことを楽しみ、手間ひまを惜しまず、食べ物に季節と信頼性を尊重する活動を推進してきた。土地や海が与えて食えた恵みの本当の意味、それによって私たちがつながっていることを本質的に理解しようとする哲学が多くの人々に共有されている。

食では、ブラックプディング（豚の血入りの黒ソーセージ）発祥のまちとして有名である。ピアース通りのトゥーメイ（Twomey）氏の精肉店が 1880 年代に開発、代々受け継がれている。また海が近く、魚のパエリアも地元レシピとしてよくつくられる。

2012 年から 6 月第三週に世界で唯一の「みんな親切祭り（Random Acts of Kindness Festival）」という多文化共生、ホスピタリティをテーマにしたイヴェントが行われている。「くよくよしないでポジティブに」をモットーに、アイルランドのカラーである七色をシンボルにした飾りつけ、食の提供、対話のワークショップ、音楽イベントなどが 3 日間、開催されてにぎわう。

（早田宰）

参考

https://www.facebook.com/ClonakiltyRandomActsOfKindnessFestival

http://www.raokclon.com/kindness-wall/

http://maxwellphotographyblog.wordpress.com/2011/11/22/first-irish-town-wins-prestigious-internation/

http://www.clonakilty.ie/food/

http://cammyharley.blogspot.jp/2012/07/random-acts-of-kindness-festival.html

http://www.clonakiltymarket.com/The_Market.html

http://notaboutseeds.blogspot.jp/2009/04/well-done-clonakilty-marketeers_03.html

http://www.panoramio.com/photo/10524706

http://www.panoramio.com/photo/3767892

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 17>

クリスチーヌスタッド（Kristinestad）

[フィンランド]

クリスチーヌスタッド

クリスチーヌスタッドは、フィンランド南西部にある港町である。ポフヤンマー県に属し、ボスニア湾に面し、スーポフヤ沿岸郡に属している。現在人口は約 7,200 人。

1649 年にボスニア湾の周りの貿易を強化するために Koppö の名で都市がつくられ、1651 年にスウェーデンの女王クリスティーナにちなんでクリスチーヌスタッドと改名された。

港としての優れた条件がそろっており、貿易、造船、皮革工場、醸造所、漁業などによって町は栄えてきた。木造家屋や狭い路地の旧市街が特徴的で知られ、フィンランドで最も保存状態の良い木造のまちのひとつである。

クリスチーヌスタッドでは 1700 年代からのマーケットの伝統が今も続いており、夏、秋、冬の年に 3 回市場が広場全体を埋める。中でも夏に行われる旧市場の日には、350 年前から変わらず住民やゲストは伝統服で着飾り、1 年の中で最も規模の大きな市場となっている。

2011 年 4 月、フィンランドで初めてチッタスローに加盟した。加盟後に開催された夏の市場では約 50,000 人もの観光客が訪れた。2013 年の夏もバスグループやツアーの予約は近年と比べ 20～30%上昇し、チッタスロー加盟の影響と見られている。

現在、クリスチーヌスタッドは持続可能な発展を目指し、街に活力を与えるだけでなく、より多くの観光客、企業、新たな居住者を誘致するための方法と解決策を探っている。

現在、2020 年から開始する予定の「チッタスローによる都市の戦略」を、住民と関係団体が協議しながら練っている。

（西村真穂）

Cittaslow- Kristinestad

http://www.cittaslow.org/network/location/293

Kristinestad

www.kristinestad.fi

Visit Kristinestad

http://www.visitkristinestad.fi/

写真

http://marinas.com/view/overview/1653_Kristinestad_Harbour__Finland

http://www.cittaslow.com/cittaslow_norden/kristinestad/

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 18>

ポッリカ（Pollica）[イタリア]

ポッリカ

ポッリカは、イタリア共和国カンパニア州サレルノ県のコムーネの 1 つで、世界遺産に指定されているチレントおよびヴァッロ・ディ・ディアーノ国立公園の中にある。人口は約 2,400 人、町は海岸の沿いの丘の上に位置している。オリーブやロックローズが咲く海岸沿いの斜面に家々が立ち並ぶ。町には古代の時代ごとの建築様式の建物が手を加えられずそのまま残っており、美しい風景が広がる。

海洋環境、効率的サービス、廃棄物、エネルギー、医療、特産食品、場所の楽しさ、快適さの維持にとり組んでいる。

アンチョビは、ポッリカを代表するスローフードの 1 つである。淡いピンクの肉で、最低 4 ケ月以上漬けこみ、強烈で繊細な香りが特徴である。

チレント海岸では、伝統アンチョビ漁が現在もおこなわれている。木の小舟（メナイデ）で 200m もある長網（メナイカ）を使う。地中海全域に広まっていた古代からの技術であるが、現在ではここを含めたわずかな場所でしか行われていない。伝統的な漁業が若い世代に受け継がれていくのはだんだんと難しくなっている。そこでポリッカは、7 月に「フレーバーの港」や「漁師の饗宴」といった魚を主としたローカル食品の試食などを行うイベントを開催している。こうしたイベントにより、若い世代に伝統漁業に関心をもってもらうよう努めている。

カチョ・リコッタチーズが有名である。チレントヤギのミルクから作られる。チレントヤギは、ほとんどが食肉用であるが、そのミルクは格別である。

演劇と文学の村としても有名で、ポリッカ内の村、ガルド（Galdo）では演劇がさかんで、2006 年にチッタスロー・ナショナルアワードを受賞している。

（竹内理恵）

参考文献

Comune di Pollica

http://www.comune.pollica.sa.it/index.php

伝統アンチョビ漁

http://www.cilento-travel.com/en/cilento/customs-tradition/alici-di-menaica.html

<世界のスローシティー海沿いのまちをゆく・シリーズ 19>

ソクンダル(Sokndal) [ノルウェー]

ソクンダル

ソクンダルは、ノルウェーの南西、北海に隣接する港町で、約 3,250 人が暮らしている。湖、最大標高 600m ほどのなだらかな丘陵エリアが連なる。北海の沿岸は「鉱脈海岸」といわれ、ソクンダルは斜長岩の地盤にチタン鉄鉱を埋蔵しており、近代以降の経済の重要な要素になっている。

「サーモン川」として有名な Sokna 川が流れ、海岸線には 7 つの小さなフィヨルドが切り込んで自然の港となっている。河口には美しい伝統的な漁業集落ソグンストランド（Sognstland）がある。サーモン、タラ、ニシン、サバ、ロブスターが水揚げされる。19 世紀にはオスロなどへの海路の港として機能していた。その繁栄を伝え、ノルウェー国内で唯一 1700 年代と 1800 年代の木造建築の歴史的な街並みが保全されている。

ソクンダルは北欧で初めてスローシティに認定された。

スローシティにふさわしい景観デザインづくりを目指している。湖ではサーモンやマス釣り、ダイビング、丘陵エリアでは山登りや豊富なトレッキング・コースが人気である。

サーモン祭り（på Laksefestivalen）を開催している。

毎年第 39 週には「街を愛する週間」が設けられ町中が赤いハートのモチーフで飾りつけられる。ソクンダルの音楽が演奏されたり、マーケットが開かれたりと様々なイベントが行われる。

また、産業協会と協力してチッタスロー企業の認定をしている。

（彦坂千絵）

参考

http://sokndal.kommune.no/internett/forside

http://travelingluck.com/Europe/Norway/Rogaland/_3163169_Åna-Sira.html

http://sogndalstrand.mamutweb.com/

http://avisenagder.no/index.php?page=tjenester&sub=galleri&do=vis_bilde&GalleriID=1420&BildeIndeks=1

http://avisenagder.no/index.php?page=vis_nyhet&NyhetID=16753

http://avisenagder.no/index.php?page=tjenester&sub=galleri&do=vis_bilde&GalleriID=1421&BildeIndeks=131

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 20＞

サンヴィンツェンツォ（San Vincenzo）［イタリア］

サンヴィンツェンツォ

サンヴィンツェンツォは、イタリア共和国トスカーナ州リヴォルノ県に位置するコムーネとよばれる人口 6,528 人の自治体で、ティレニア海に面しています。Colline Metallifere という山々のふもとにあるという比較的恵まれた立地のため古くから人が集まり、そのおかげで港が発達したと考えられる。

車や電車で簡単にアクセスでき、ピサの国際空港からは 70km ほどの距離である。

ここの一番の魅力は綺麗な砂浜と海。この綺麗さの証明として海岸に青い旗（The Blue Flag）を設置する運動を行った。これはヨーロッパ全域で綺麗さの証明として使われているもの。サンヴィンツェンツォはこれの設置のために海の水質調査の数を増やす、浜辺でのクリーンアップキャンペーン、犬用の無料のビーチ(dog beach)を作るといったことを行った。美しい海と砂浜を楽しむための海水浴場が整備され、また港には旅行客用の設備が充実した船着き場が整備されている。

次に魅力的な素晴らしいスポーツ施設がある。サッカー、アーチェリー、バレーボールなど幅広いスポーツが楽しめる。それらのスポーツ施設を使って様々なスポーツイベントが開かれているが、そのなかでも Gran Premio Costa degli Etrusch という自転車レースがとても有名である。その他にもスパがあり、旅行地で休息をとりたいという旅行客のニーズも満たしている。

食に関しては Presidi Slow Food という国際的なスローフード振興団体に属しています。有名な食のイベントで Crazy for Palamita というものがある。いわゆるかつお祭りです。主役のハガツオはカツオの仲間のサバ科の魚で 、スローフィッシュに認定されている。レストランがハガツオを使ったレシピで競い合う。またクイズに正解した人に美味しい料理を振る舞う、という企画も実施されている。

(品川 達宏)

参考文献、画像掲載元

San Vincenzo マリーナ紹介ページ

http://www.marinadisanvincenzo.it/

San Vincenzo 観光案内ページ

http://www.comune.san-vincenzo.li.it/index.php?id_sezione=572

Citta Slow San Vincenzo 紹介ページ

http://www.cittaslow.org/network/location/137

San Vincenzo 紹介ページ

http://www.residence-san-vincenzo.com/holidays_flats.htm

ハガツオを使ったレシピの一例

http://www.identitagolose.it/sito/it/dall_italia.php?id_cat=44&id_art=5877

San Vincenzo のハガツオの紹介ページ

http://www.comune.san-vincenzo.li.it/pagina721_palamita.html

Wikipedia

http://en.wikipedia.org/wiki/San_Vincenzo,_Tuscany

補足

Slow Fish の紹介ページ

http://www.slowfood.com/international/124/slow-fish

自転車レースのニュース

http://www.bicinews.net/2010/01/14/tmc-transformers-title-sponsor-del-gp-costa-degli-etruschi/

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 21＞

マリアガーフィヨルド（Mariagerfjord）

［デンマーク］

マリアガーフィヨルド

マリアガー＝フィヨルド市（Mariagerfjord）はデンマーク・ユトランド半島の北東部に位置するマリアガー＝フィヨルド（長さおよそ 35km でデンマーク国内では長い部類のフィヨルド）の周囲に位置する、42.111 人（2013 年現在）の人口を有する自治体である。2013 年にデンマークで 2 番目のスローシティに認定された。

上記のフィヨルドに加え森林や湖の多い自然豊かで、アウトドア活動が盛んである。湖畔や森林でのハイキング・サイクリングツアーに参加することができ、多くの釣りスポットがあり、カヤックやカヌーを使ってフィヨルド水上周遊を楽しむことができる。特に釣りが盛んである。フィヨルドに点在する数多くの釣り場に移動しては釣りを楽しむことができる。デンマークのみならずヨーロッパ各国から釣り客が訪れる。

マリアガー＝フィヨルドでは食文化としてビール製造が盛んで、醸造所が点在する。古いものでは 150 年の歴史がある。Hobro 地区では年に 1 回ビール祭りが行われ大いに賑わう。他にも Pig Party，Beef Festival など食にまつわる行事はこの街では年間を通じて多い。

（鈴木雄太）

参考

マリアガーフィヨルド市サイト

http://www.mariagerfjordkommune.dk/

観光案内サイト

http://translate.googleusercontent.com/translate_c?depth=1&hl=en&rurl=translate.google.com&sl=da&tl=en&u=http%3A%2F%2Fwww.visitmariagerfjord.dk%2Fdanmark%2Fmariagerfjord-turist&usg=ALkJrhjcJe6GLIM4MFISwfsZFVkS3okcDg

http://translate.googleusercontent.com/translate_c?depth=1&hl=en&rurl=translate.google.com&sl=da&tl=en&u=http%3A%2F%2Fwww.visitmariagerfjord.dk%2Fdanmark%2Fmariagerfjord-turist&usg=ALkJrhjcJe6GLIM4MFISwfsZFVkS3okc

ウィキペディア

http://ja.wikipedia.org/wiki/マリアガー・フィヨルド

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 22＞

シナングン・チュンド（新安郡・曽島）（Sinan-gun Jeung-do Island・증도면）[韓国]

チュンド

新安郡は朝鮮半島の西南海上にある 1004 の島から構成される。人口は 47,591 人（2004 年）である。歴史上、地理上、東アジア貿易の要所でもある。そのうちチュンド（曽島）がチッタスローに指定されている。チュンドの人口は、1,906 人（1999 年）である。周囲には 90 の無人島がある。

チュンドには、広大な干潟と韓国最大の塩田があることで有名である。

干潟はユネスコ生物多様性保全地域にも指定されている。海上に建設された 470 メートルの木造橋の「ムツゴロウ橋」から様々な生物が観察できる。夕暮れ時には美しい日没が観賞できる。観光客向けに、干潟生態展示館がある。

塩田は、韓国最大規模の塩の生産地であるテピョン（太平）塩田がある。1953 年につくられた施設で、塩製造に携わる人々の住宅や建物が昔のまま残っており、韓国の伝統的な漁村の様子を感じることができる。

塩は、伝統的な天日塩で時間をかけて製造する。ミネラル豊富で、結晶粒が大きく、その質は世界でもっとも高価な塩として有名なフランスのゲランド塩よりも質が良いともいわれ、世界から脚光をあびている。

観光客向けに、塩の博物館がある。塩田体験などをおこなっている。

そのほか、美しい（ウジョン）羽田海水浴場がある。長さ 4 キロメートルにおよぶ。

2007 年にアジアで最初にスローシティに指定された（ワンドなど他 4 地域と同時）。イベントとしては、毎年海開きの時期に「新安ゲルマニウム干潟祭り」がおこなわれる。干潟自然探査、マッドマッサージ、干潟ソリ、ハマグリの潮干狩り、ハゼ釣り体験などがおこなわれている。マラソンやフットサル、水泳などのスポーツ競技もおこなわれる。

スローフードとしては、スズキやクロダイの刺身、メウンタン（魚の辛味鍋・매운탕）などが人気がある。

韓国ドラマ『ありがとうございます』『花島（ファド）』のロケ地としても知られる。

(早田　宰)

写真

http://flykorea.blog5.fc2.com/blog-entry-413.html
http://blog.naver.com/realatblog/110083916156
http://blog.daum.net/landla/5030389
http://blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=cky3954&logNo=150122299406

地図

Google

参考

http://www.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE_JA_7_3_8_10_4.jsp

<世界のスローシティ―海沿いのまち―をゆく・シリーズ 23>

セジフィールド(Sedgefield)

[南アフリカ共和国]

セジフィールド

セジフィールドは、南アフリカ共和国、ケープタウンの東 500Km にある沿岸の町で、クニスナとジョージの間に位置している。人口は 8,286 人(2011 年現在)。 海洋気候で一年中温暖であり、夏の暑さ、冬の寒さとも穏やかである。周辺は豊かな生態系を保持し、多様な動植物、鳥類の楽園である。広大な湖、自然保護区、インド洋沿いの居住地区で構成されている。1920 年代に欧州諸国の人々の「冬のリゾート」として発展した。町の主要な経済活動は観光業で、地元の農民の生活との共存発展が目指されてきた。

2010 年 10 月にアフリカで初めてチッタスローに加盟した。のんびりと居心地の良い素朴な町の雰囲気を大切にしており、「カメのペースで」(the tortoise sets the pace）がスローガンやシンボルである。

ミオリビーチやコーラビーチは、地元住民から愛されている。野鳥観察者は美しい多様な種類の鳥たちのバードウオッチングを楽しむことが出来る。ゴルフコース、テニスコートなどもある。

スロータウンのアイデンティティを確立するために努力してきた。毎週土曜の朝に「ワイルド・オーツ・マーケット」(Wild Oats Market)が開かれている。北米一帯に展開している地域マーケット推進グループの主催である。良質な地元産の食品を売買するもので、女性たちのその運動がスロータウン認証へとつながることになった。

まちではカメの彫刻を置いたり、歴史的建造物のハードウイックタワー（hardwick tower）の保存をしてきた。スロータウンを掲げることによって、外からの観光旅行のアイデンティティ確立と地元農民たち様々なコミュニティ向上プログラムの融和が図られてきた。特に貧困居住者がアートの訓練を受け、まちのランドマークとなる展示物やベンチ、サインなどの図形をモザイク・タイルで飾るモザイク・プロジェクトはその一環である。

2013 年 3 月 29～31 日の間、「スローフェスティバル」が開催された。テーマは「古き良き時代のスタイルで楽しもう！」（Fun! The way it used to be）である。テレビ、携帯などがなかった頃のスタイルで楽しむ。

「生チョコのワークショップ」が開催された。シュガーフリーのチョコレート本来の味でお菓子をつくるワークショップである。また、期間中はまちのレストランで、地場産のメニューを楽しむことができる。

アクティビティとしては、パラグライダー、ビール競争、ゴウカマ(トレイルラン競技)、家族向けの劇場ショー、スローフェスティバル、ガレージセール、イースターバニー、ビーチ・バレー、美人コンテストなどである。イベントの収益は、地元の慈善団体、学校へ寄附された。

(吉田優佳)

参考文献

Slow Festival website

http://www.slowfestival.co.za/assets/content-page.php?id=home

Slow Festival' promotion video [URL]

http://www.youtube.com/watch?v=ua1RCpx7Ups&feature=player_embedded

Content posted by Slow Festival

http://local-info.co.za/users/9367?page=1

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 24＞

ベグール（Begur）[スペイン]

ベグール

ベグールは、スペイン東部カタルーニャ地方のフランス国境に近い港町で、人口 3,986 人 (2005 年) である。村には重要な歴史的建造物がある。ベグール城がシンボルで、16 世紀と 17 世紀に建設された。フランスと 3 度の戦争の舞台になっている。

地中海沿岸でバルセロナの北側からフランス国境にかけて Costa Brava（コスタ・ブラバ）と呼ばれる岩の荒々しい海岸が続く。険しい断崖と砂浜が交互に続く。ベグールはその典型のまちである。

なかでもベグール岬は、絶景を観賞することができる。岩石トンネルを通過すると気象観測所があり、海抜 200m の松林のつづく断崖からコスタ・ブラバの連なりを堪能することができる。

1950 年代にコスタ・ブラバは、ヨーロッパ有数のリゾート地として持続可能な開発が行われた。小さな村であるが、夏の期間の滞在人口は 40,000 人を超えるともいわれる。海岸沿いは入り江には透明度の高い小さなビーチやマリーナがあり、散歩道でつながっている。イラロハ浜はヌーディスト・ビーチとして有名である。

地域の環境や食材を活かしたレストランが多い。

「ベグール国際音楽祭」は夏のイベントとして、1977 年以来の長い歴史を持っている。

「インディアン祭り」は、9 月最初の週末に 3 日間、盛大におこなわれる。キューバとの歴史的関係を祝うためである。コスタ・ブラバの住民は 19 世紀に数多くキューバに移住したのである。カリブ海の白い服を着て歩く。ヤシの葉と海上モチーフがはっきりカリブ風味の製品のすべての種類を提供する屋台が多く出る。教会は窓やコーナーを飾る。ジュエリー（ブレスレット、ネックレス、イヤリング）、装飾的な工芸品、魚介類、食品（ラム酒、ココア、コーヒー、ハーブ、チョコレート、スパイス）、ハーブ、様々な工芸品（かご、ガラス）が販売される。カリブ海料理（ナチョス、フライドバナナなど）、モヒートなどが味わえる。ダンス、サルサ等で街路はにぎわう。

（早田　宰）

写真・参考

http://www.colina.co.uk/

http://blog.costabravas.fr/begur-slow-city/

http://blog.costabravas.fr/le-semafor-du-cap-de-begur/

http://blog.costabravas.fr/festival-musique-begur/

http://blog.costabravas.fr/fira-indians-begur/

http://fondacaner.com/fr/begur.html

http://www.elpuntavui.cat/noticia/article/2-societat/5-societat/277252-begur-reviu-el-seu-passat-india.html

<世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 25>

レヴァント（Levanto）[イタリア]

レヴァント

レヴァントは、イタリア共和国、北部に位置するリグーリア州ラ・スペツィア県のコムーネの一つ。人口は 2005 年現在で約 5600 人の小さな町。レヴァントを含むリグーリア州は湾がそのまま州になっている珍しいエリアで、まさに海沿いのスローシティと言える。

北イタリアでありながら、イタリア半島を縦貫するアペニン山脈が北部の寒気を遮断することで、年間を通して南イタリアのように温暖な地中海性気候となっている。世界遺産にも登録されている、海岸に立ち並ぶ色とりどりの屋根や外壁を持つ 5 つの集落、チンクエ・テッレもこの州にある。海岸沿いの美しい防潮堤もレヴァントの特徴のひとつである。ドイツ初のスローシティ、ヘルスブルックと姉妹都市協定を結んでいる。

スローシティに 2005 年、認定された。

レヴァントの楽しみ方は多岐にわたる。およそ 1km に及ぶレヴァントの湾は、美しい砂浜、絵に描いたように綺麗な入江をも持って訪れる人々を魅了する。リゾート地を思わせるゆっくりとした空気が流れる。このため、地元民や観光客のみならず、各地のサーファーにも注目されている。

食の面では、地中海性気候を生かし太陽の恵みを受けて育ったオリーブ、それを基に作られるオリーブオイルや、ブドウから作られる種類豊富なワインが有名だが、その他にもレヴァントには伝統的で個性的な料理がある。パスタ等に使われるバジルソースでお馴染みのペストと呼ばれるものは、同リグーリア州ジェノバ発祥のため、レヴァントでも人気だ。

海沿いの漁師町ならではの料理も見られる。塩漬けしたアンチョビや、地元で収穫された果物から作ったドライフルーツをミックスした甘いパンである。これらは保存が効くため、水夫たちに重宝されていた。こうした元々は漁師向けに作られた食事も、今ではレヴァントの郷土料理として浸透している。食と生活の密接さがうかがえる。また、主食を米とする日本人にでさえ馴染みのない、お米のパイというものもある。

一年にわたりいくつも開催されるイベントがさらにレヴァントを賑わせ、外部に魅力を発信している。5 月の第 3 日曜日、Mangialonga と呼ばれるイベントが行われる。これはレヴァントの谷沿い 15km の小道に沿ったいくつもの村々を歩いてまわるイベントで、参加者およそ 1000 人を、地元産ワインや伝統料理の出店が迎える。夏には Amefiteatrof Festival という国際音楽祭や、Laura Film Festival(ローラ映画祭)、そして航海の聖者を祝う大イベント、The Sea Festival(海フェスティバル)が開催され、普段から美しいレヴァントの湾をロウソクの灯火でライトアップ、さらには海から花火を打ち上げ、見るものを魅了する。秋を迎え少し涼しくなると、Stralevanto という 15km の谷のランニングイベントや、夏の Mangialonga と似ている歩きながら伝統料理や地元作物を楽しむ De Gustibus Tour が行われる。

レヴァントはその地形や景観の美しさをゆっくり歩きながら見て発見してもらうことを大切にしているようだ。そこに出店を用意することで美味しい食材を効率良く多くの人に堪能してもらうのは工夫ポイントと言えるだろう。

（瓜本陽子）

参考

Cittaslow Levanto

http://www.cittaslow.org/network/location/182

スローシティ GOETHE INSTITUT

http://www.goethe.de/ges/umw/dos/nac/leb/ja1368906.htm

レヴァント wikipedia

http://ja.wikipedia.org/wiki/レヴァント_(イタリア)

写真

http://www.villastalla.com/?page_id=20

http://www.hotelpalacelevanto.it/eng/excursions-and-trips-levant

o-and-surroundings.asp

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 26＞

ポジターノ （Positano）[イタリア]

ポジターノ

ポジターノは、イタリア中南部カンパーニャ州ティレニア海に面した港町で、2010 年当時で、人口は 4000 人に満たない。

イタリアの中でもっとも美しいとされるアマルフィ海岸、リアス式の急傾斜の海岸線沿いにある。アマルフィ海岸一帯は 1997 年に断崖に密集する家々の文化的景観が評価され、UNESCO 世界遺産に登録されている。

この小さなコムーネが歴史に登場するのは 10 世紀初頭である。同じカンパーニャ州にあったポセイドン神殿をイスラム教徒が襲撃した際、そこから逃れた人が定着したという記録がある。それまでは外から侵入しにくい、この地形を生かした正教会修道院があった。地域全体が景勝地であり、ウェディングスポットとして人気がある。そのシンボルはモンテ＝ペルトゥーゾ(孔空山、標高 510m）である。

現在、漁業従事者はほとんど存在しない。観光業を中心としている。1950 年代以降、避暑地として人気になるにつれて、リゾートファッションの発信地となっていった。リゾート地として、観光産業の人気があるため、スローシティとしてはむしろ例外的に、５つ星や 4 つ星の高級ホテルやシーサイドレストランもある。大音量の音楽や夜通しのパーティもある。魚食のイベントも開催されている。

ポジターノは、1999 年に設立されたチッタスローのオリジナルメンバーとなる。ポジターノがスローシティとしての面目を発揮するのは、山間部の集落で、過疎に悩まされているという半面、家庭菜園を中心とした自給自足経済によるスローライフである。切り立った断崖は 19 世紀に切り開かれた。盛り土の岩場ではレモンが栽培されている。一時期、安価な量産品種の流入に圧迫されていたが、2002 年に地元農家が組合を結成し、地元のレストランやホテル、土産物屋、喫茶店等と連携し、食材として取りこみ、レシピを開発していった。収穫残渣のレモンの皮を浸したモンチェッロ酒も開発され、赤字であったレモン産業を黒字へと転化することに成功した。レモンによる町おこし、レモンツアーも催行されている。

また、麻の製品のハンドメイドも人気である。材料を 100 パーセントイタリア産にすることにこだわっており、中世アマルフィア王国時代の織物産業に起源を求めることが出来る。

映画の撮影としてもしばしば採用され、例えば、西谷博監督の『アマルフィ女神の報酬』（東宝／2009 年）の舞台とされているなど全世界から注目されている。

(高橋雅臣)

【写真出典】

http://perfectitalywedding.com/wedding-in-positano/

http://www.allarounditaly.net/positanos-best-local-foods/

http://amalfi-coast.com/chez-black-positano

http://www.hillmanwonders.com/italy/positano.htm

http://www.planetmountain.com/gallery/img_d.php?keyID=11299

http://www.capri.com/en/c/amalfi-positano-boat-tours

http://brxidges2wellness.com/

http://www.positanonews.it/photogallery/126/6254.html

http://positanomylife.blogspot.jp/2010/10/xix-festa-del-pesce-positano.html

http://www.positanoboat.com/

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 27＞

気仙沼・唐桑（Karakuwa area, kesennuma City）

唐桑地区

唐桑地区は、宮城県の最北端に位置する唐桑半島一体を指す地域である。かつて「唐桑町」という名で存在していた町は 2006 年に気仙沼市と合併した。旧唐桑町エリアの平成 25 年 7 月現在の人口は 6,998 人（震災以前の平成 22 年 10 月の旧唐桑町は 7,420 人）。唐桑半島は、リアス式海岸に特有の美しい景観と牡蠣などの良質な海産物の資源に恵まれた半島である。唐桑地区は、海・山が一体となり、豊かな自然環境と生産環境を維持し、漁業を営み、誇りをもって発展してきた。鰹節の北限「三陸節」の伝統的な製造もおこなわれている。御崎神社の「はじき猿」など季節の風物詩も有名である。

当地区では「森は海の恋人」をキャッチフレーズに、２０年以上前から山に木を植える運動を行っており、山と里と海を結ぶ視点で牡蠣を育ててきたことで有名である。この活動の中心を担う畠山重篤さん（NPO 法人 森は海の恋人理事長）は漁業関係者として初めて「朝日森林文化賞」を受賞している。

東日本大震災により、広範囲に及び壊滅的な被害を受けた。被災後、早馬神社は報徳二宮神社（神奈川県）から支援を受けて復興の検討を直後より開始し、同年 5 月に「気仙沼市唐桑地区復興支援協同体」を立ち上げた。唐桑地区の経済復興を第一目的とし、漁業面での復興を中心に活動を始めた。

気仙沼市唐桑地区復興支援協同体は取り組む事業に以下の 6 つを挙げている。(1)養殖漁業に関する事業の再開～出荷までの事業支援,(2)漁業に関する事業再開～出荷までの支援事業,(3)観光飲食事業に関する事業,(4)みやげものを中心とした物品販売事業,(5)その他震災からの復興支援に関する事業,(6)復興募金活動。さらに具体的な事業としては、牡蠣養殖再開の為の復興ボランティアツアー、旅行代金に義援金を含めて行う復興支援ツアー、物販の販売や、牡蠣 1 口オーナー制度として成功しているアイ・リンクを参考にした義援金付先払い商品として販売する「わかめオーナー制度」を挙げている。

2012 年にオープンした復興かき小屋「唐桑番屋」などの食事処の案内に力を入れたり、唐桑地区で採れた海産物の通信販売を行ったりしている。通信販売では、「もまれ牡蠣」、生わかめ「春馬」などを販売し、好評を得ている。また、観光の一環として、漁業や伝統工芸の体験なども行っている。体験観光では「自然と生きることの大切さや、互いに触れ合う楽しさ」を感じることができるという。

国際的なネットワークからの支援を受け、被災直後にはフランスのブルターニュの牡蠣養殖業者 SAS ミュロから「フランス okaeshi 作戦」で養殖漁具が届いた。NPO 法人プラネットファイナンスジャパンがコーディネートした。2013 年 8 月に気仙沼市唐桑町馬場に気仙沼図書館唐桑分館「唐桑コミュニティ図書館」を開館させた。これはスウェーデンに本社を構える Tetra Pak(テトラパック)の支援により実現した。机や椅子は同じくスウェーデンの会社である IKEA(イケア)によって支援された。

国内からのボランティア受け入れも活発で、『かき砕き』等を行っている。

スローフードとしては、「かにばっとう」などがある。

(岡本一花)

参考文献

気仙沼市唐桑地区復興支援共同体
http://www.karakuwa.jp/

気仙沼市唐桑地区復興支援協同体設立のお知らせ
http://www.karakuwa.jp/global-image/units/upfiles/64-1-20110618172246.pdf
気仙沼市唐桑地区復興支援協同体　概要
http://www.karakuwa.jp/global-image/units/upfiles/66-1-20110630154748.pdf
唐桑町観光協会
http://www.karakuwa.com/
マスヒロ食時記 http://msh.weblogs.jp/season/2012/07/森は海の恋人唐桑畠山重篤さんの牡蠣帆立.html

写真
http://www.karakuwa.jp/association/
http://www.karakuwa.jp/banya/
http://ameblo.jp/fukkokaki/entry-10944329587.html
http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/index.cfm/6,4397,107,html
http://blog.canpan.info/entoki/archive/145

＜世界のスローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 28＞

気仙沼・本吉（Motoyoshi Area, Kesennuma City）

本吉地区

気仙沼市本吉町は、気仙沼市の南部に位置する太平洋沿岸の地区である。2009 年 9 月に気仙沼市に編入された。旧本吉町の人口は 10,556 人（2013 年現在)である。

平泉藤原氏の黄金文化を支えた産金地の一つと伝えられ、特に大谷鉱山は、明治から昭和にかけて、日本屈指の金山として栄えた。

南三陸町との境界にある田束山（たつがねさん）は、古くから霊峰として栄え、奥州藤原氏も進行したといわれる。徳仙丈山（とくせんじょうさん）は東北百名山に数えられ、つつじの名所として有名である。大谷金山跡（高瀬ヶ森）には資料館がある。牧場であるモーランド本吉がある。

沿岸部には、蔵内、今朝磯、小浜、小泉、明戸、津谷、赤牛、前浜、日門、杉の下などの港がある。

小田の浜海水浴場、お伊勢浜海水浴場、大谷海水浴場、小泉海水浴場の４つの海水浴場がある。とくに大谷海水浴場は日本一駅に近い海水浴場として有名で、防潮堤の争点となっている。

地域特産品としては、マンボウ、岩ガキ、わかめなどがある。岩ガキは普通のカキと比べて味が濃く、特に本吉で取れるものはサイズが大きい。モーランド牛乳のほか乳製品（ヨーグルト、ババロア、アイスクリーム）を生産している。また農産品として、しょうがなどもつくられている。

祭りとしては、山田大名行列がある。江戸時代から無病息災、五穀豊穣を長って受け継がれ、現在は気仙沼市指定の無形民俗文化財に指定されており、通常は三年に一度開催される。本来の開催年だった 2011 年は震災の影響で延期となり、2012 年に４年ぶりに開催された。

東日本大震災後、被災直後の避難所は、行政施設（公民館、コミュニティセンター、集会所）のほか、小泉中学校、仙翁寺、清涼院、及川デニムなどに設置された。各地区で復興まちづくり活動がおこなわれている。

復興まちづくり活動としては、uemirai（うえみらい）シャンティ国際ボランティア会などの活動、多様な団体の海岸清掃がある。

また、本吉復興エコツーリズムの被災地観光の支援活動がある。多くの人が本吉地区に足を運び、ボランティアを通じて現地固有の空気や文化、人に触れる機会を提供している。

まんぼうを震災前よりまちおこしのシンボルとしている。

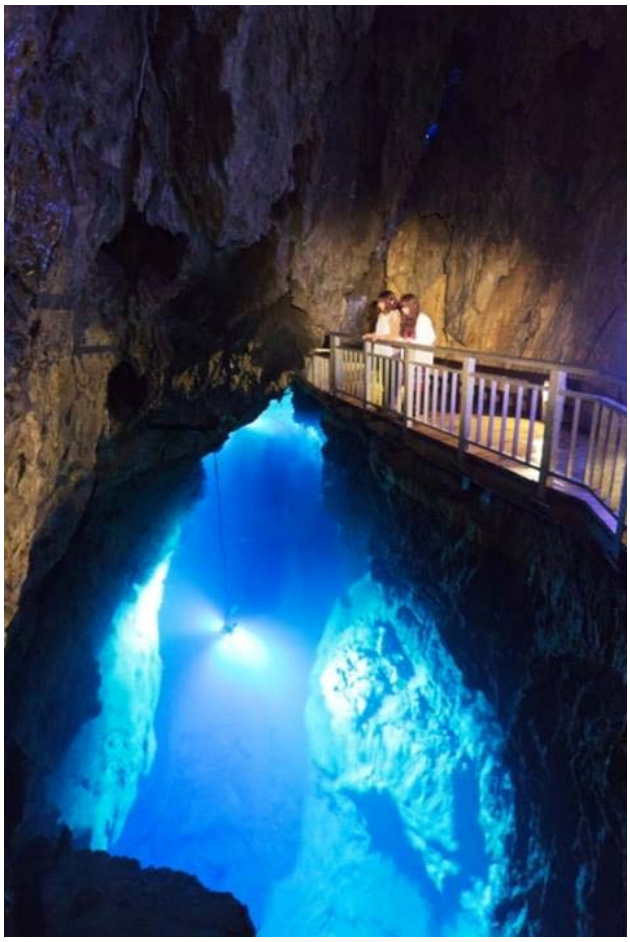
（高木美沙）

＜参考文献＞

http://kotnet.web.fc2.com/index.html
http://blog.goo.ne.jp/akazara_boy
http://www.rias.miyagi-fsci.or.jp/mt/toku/iwagaki.html
http://www.city.kesennuma.lg.jp/www/contents/1250664299966/index.html
http://www.umaikaki.com/oya/shohin_iwakaki.html
http://blog.goo.ne.jp/akazara_boy/e/49d488ef4dcea52b1d8fe88383bee793
http://d.hatena.ne.jp/kyotosgkesennuma/20110909/1315571238
http://www.saikichi-pro.jp/blog.php?MODE=put&CID=4&ID=76
http://www.d1.dion.ne.jp/~fugetsu/manbou.htm
http://www.nihon-kankou.or.jp/hana/detail/view.php?id=H05040300&m=7
http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kasen/ka-kg-syokai-2.html

＜スローシティー海沿いのまちーをゆく・シリーズ 29＞

チッタスロー　日本の取り組みは今



龍泉洞（岩泉町）

日本においてチッタスロー協会本部から正式に認証されている都市は、「気仙沼市（宮城県）」のみである。チッタスローに認証されるには、人口 5 万人以下の小規模都市であることや、独自の食文化が浸透していることなど、５０項目を超える細かい条件をクリアする必要がある。チッタスローに認定されることは、ひとつの都市のステイタスを示す。料理店における「ミシュラン」ブランドのような意味を持つ。

チッタスローの根底には、スローフード、つまり食を中心とした地域の伝統的な文化を尊重し、生活の質の向上を目指すという考え方が存在する。日本国内におけるスローフード運動は、2004 年以降、「スローフードジャパン」という団体に支えられており、2013 年夏現在までに全国に 47 の支部が設けられている。さりながら支部によってその規模や活動の力の入れ具合はまちまちである。スローフードのみならず「チッタスロー」への広がりを意識した活動をしている団体もあれば、そうでないものもある。エリアの広がりも、「青森」や「高知」のように県レベルで活動している支部もあれば、「しむかっぷ（北海道）」や「秦野（神奈川）」のように市区町村の生活圏エリアで活動している支部もある。活動スタンス、取り組み内容、活発さも多様で、中には独自でホームページを開設して通信販売を行っている支部までさまざまだ。

47 の中から、チッタスローの視点をもった団体（岩手県）と、市区町村での取り組み典型的なスローフード団体（淡路島）を紹介する。

チッタスローの視点をもった団体として、「スローフード岩手」があげられる。活動拠点は、北上山地と太平洋に囲まれた、岩泉町という自然豊かな町である。

岩泉町は、人口は約 1 万人、面積は 993Km2 と本州一広い。岩泉町には「短角牛」や「安家地大根」のように、その地域特有の食の絶滅危惧種「味の箱舟」プロジェクトに認定された食材が名産品としてあり、生産者と消費者のパイプラインとなるツアーや食談会イベントが随時開催されている。観光客は「道の駅いわいずみ」に行けば、地元の食材を購入したり、その食材を使った料理を味わったりすることができる。首都圏でも「いわいずみ飲むヨーグルト」を見かける機会が多い。

チッタスローの考え方で生活の質の改善、オルタナティブ開発にも力を入れている。岩泉町では、災害公営住宅の家賃 50%減額し、被災者を支援している。食以外でも、岩泉町には北上山地の森や広大な海、神秘的な洞窟「龍泉洞」（写真）のように、豊かな自然環境もあり、その保全にも力を入れている。

市区町村での取り組みは、三大都市圏では事例が少なくない。地方では県レベルになってしまう。その中で市区町村の生活圏にこだわって成果をあげている数少ない団体のひとつに、「スローフード淡路島」がある。「食から始まる郷土づくり」を活動テーマに、島に昔から伝わる固有の食材や伝統料理を広く紹介し、スローフード活動の啓蒙に努めている。「淡路ビーフ」は、もともと神戸牛や松坂牛のルーツであると言われていて、その優れた肉質は全国で高い評価を受け今もなお和牛改良に広く活用されている。また「淡路島玉ねぎ」は瀬戸内海特有の温暖な気候のもとで育てられた、全国随一の歯ごたえと甘さを誇る最高品質の玉ねぎである。これらの食材をご当地キャラの「あわじい」を先頭に、子供たちを中心に広めている。

岩泉町や淡路島は、小さな規模を機動力のある活動に転換しているチッタスローを目指す都市にとって参考になる。気仙沼にかぎらず、岩泉町や淡路島にように地震や津波で被災したスローフード地域が、さらに日本で２番目、３番目の「チッタスロー」として認証され、世界レベルで魅力的な観光地になることを期待したい。

(渡邊　諒)

写真

http://www.tohokukanko.jp/iwate/17927/

参考文献

スローシティー Goethe-Institut

http://www.goethe.de/ges/umw/dos/nac/leb/ja1368906.htm

スローフードジャパン

http://www.slowfoodjapan.net/

岩泉町ホームページ

http://www.town.iwaizumi.iwate.jp/

道の駅いわいずみ -岩手産業開発

http://www.ryusendo-water.co.jp/index.html

淡路島観光ガイド-あわじなび

http://www.awajishima-kanko.jp/

編集者

早田　宰（早稲田大学教授）
加藤基樹（早稲田大学助教）
阿部俊彦（早稲田大学非常勤講師）
沼田真一（早稲田大学非常勤講師）

執筆者

井上　文（早稲田大学学生）
瓜本陽子（早稲田大学学生）
岡田真也（早稲田大学学生）
岡本一花（早稲田大学学生）
小城知紘（早稲田大学学生）
品川達宏（早稲田大学学生）
鈴木雄太（早稲田大学学生）
瀬川奈央（早稲田大学学生）
早田　宰（早稲田大学教授）
中村光宏（早稲田大学学生）
西森佳悟（早稲田大学学生）
高木美沙（早稲田大学学生）
高橋雅臣（早稲田大学学生）
竹内理恵（早稲田大学学生）
西村真穂（早稲田大学学生）
原田佳奈（早稲田大学学生）
彦坂千絵（早稲田大学学生）
松田　祐（早稲田大学学生）
柳下萌季（早稲田大学学生）
吉田優佳（早稲田大学学生）
渡邊　諒（早稲田大学学生）

［問い合わせ先］

２０１３年９月

早稲田大学気仙沼復興塾
（JA 共済寄附講座「震災復興のまちづくり」）
〒169-0051　東京都新宿区
西早稲田１－６－１
早稲田大学
連絡先　早田　宰　sohda@waseda.jp